赤十字ボランティアのための情報誌

RCV

Red Cross Volunteer

2021.10
No. 77
October

過去から現在、未来に進んでいくイメージを
ボランティアが活動している写真とともに表現しました

特集1 災害と赤十字ボランティアの10年

- 熊本地震及び水害でのボランティアの声
- ボランティアのノウハウを被災地で役立てる
- 炊き出しの進化～時代とともに変化する炊き出しのあり方～
- 赤十字ユース委員会のオンライン活動

特集2 災害と赤十字ボランティアの未来

- 座談会

日本赤十字公式キャラクター
ハートラちゃん

（この情報誌は、RCV編集委員の協力で作られています）

日本赤十字社
Japanese Red Cross Society

人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

●主な災害　■赤十字の活動　◆国・他団体の活動など

2011

●東日本大震災
●台風第12号災害

東日本大震災

2012

●茨城県等における竜巻災害
●7月3日からの大雨災害
●7月九州北部豪雨災害
●8月13日からの大雨災害

2013

●7月26日からの大雨災害
●8月9日からの東北地方を中心とする大雨災害
●埼玉県・千葉県における突風災害
●台風第18号の大雨災害
●台風第26号災害（伊豆大島）および
台風第27号災害
◆「災害対策基本法」改正・「防災基本計画」改正

年表で見る過去10年の災害と被災地での活動

災害と赤十字ボランティアの10年

東日本大震災から10年という節目の年である今年2021年。この機会をとらえて、この10年間の災害を年表で振り返り、その中でも特に熊本地震や豪雨災害への対応、炊き出しの進化やユースの活動の工夫についてボランティアの声を中心にお届けします。

東日本大震災から10年

●日赤福島ボランティア会の活動

2019年11月まで70回12カ所の仮設住宅等を訪問し、延べ約560名にパッチワーク教室に参加いただきました。

パッチワーク教室の様子

●徳島県地域赤十字奉仕団の活動

2011年5月から2013年6月まで、奉仕団と事務局スタッフの延べ60人が宮城県気仙沼市や石巻市などの避難所及び仮設住宅を訪ね、計2,100食以上の炊き出しや阿波踊りの披露をしました。

徳島県地域赤十字奉仕団による炊き出し

●北海道ノルディックウォーキング赤十字奉仕団、岩手県ノルディックウォーキング赤十字奉仕団の活動

仮設住宅での生活を余儀なくされていた6,000人以上の被災者を対象に、2011年4月からノルディックウォーキングを一緒に行う活動を続けてきました。

被災者とのノルディックウォーキング

10年が経つ今も被災地に心を寄せた活動を続けます。

熊本地震及び水害でのボランティアの声

2016年に熊本県を中心に最大震度7を観測した大規模な地震がありました。昨年（2020年）7月には、熊本県を中心に九州などで発生した集中豪雨もありました。その時の活動内容とその経験からどのように現在活動を行っているかを熊本県支部の奉仕団員に取材しました。

熊本地震

救急奉仕団の概要と活動を教えてください

赤十字や他団体、学校などで開催されるイベント等への協力や、救急法講習での指導をしています。

コロナ前と後での活動の違いは

コロナ発生前の災害（熊本地震など）では、いろんな地域からボランティアが集まって活動をしていました。その時、一緒に食事をしたり会話をして、交流を深めていました。しかし、コロナ発生後は、他地域のボランティアとの繋がりが少なくなりましたが、その代わり地元での活動が増えました。

物資搬送時の様子

災害時に実践された支援はどのようなものですか

熊本地震の時は、職場の安全確認をした後、被災地へと向かいましたが、被災地には入れませんでした。そこで、日赤熊本県支部で救援物資の配送の手伝いをしたり、避難所へ県外の赤十字医療チームを案内したりしました。

物資搬送や救護所の運営補助で難しかった点

発災後数日は、被災者のニーズや交通事情などは刻々と変化します。被災地へと向かうルートは何度も変わりました。日曜日の深夜から早朝まで活動し、そのまま職場へ向かうこともありました。

地域の方に喜んでもらえたり、感謝されるのが嬉しかったです。

今後ボランティアに求められるものボランティアが求めるもの

被災地では、とにかく人手が必要となります。例えば、1人では何日もかかる作業が、10人いれば1日で終わります。また、赤十字救急法を身につけておくと、もしものときに、被災者やボランティアを助けることもできます。

赤十字救急奉仕団
岡田さん

2014

- ●長野県新城断層地震災害
- ●広島大雨災害
- ●8月京都府・兵庫県豪雨災害
- ●徳島県台風第11号・第12号災害
- ●7.9南木曽町豪雨災害

2015

- ●屋久島町口永良部島噴火災害
- ●台風第18号等大雨災害
- ●台風第21号与那国町災害
- ■「まもるいのちひろめるぼうさい」完成・配布

2016

- ●熊本地震
- ●台風10号等災害
- ●鳥取県中部地震
- ■炊き出しレシピ集発行（本社）
- ◆全国災害ボランティア支援団体ネットワーク（通称JVOAD）設立
- ◆熊本地震において三者連携による『情報共有会議』が開催

熊本地震及び水害でのボランティアの声

ボランティアに参加した動機は何ですか

石本：大学1年生の時に、東日本大震災の研修に参加しました。そのプログラムの中で被災者の大変さや苦しみを拝聴しました。また地域の助け合いから復興へ向けた過程で様々な形でボランティアが携わっていることも学びました。
それから私も「少しでも被災された方々の力になりたい」、「人の為にできることをやりたい」と思い、ボランティアに参加するようになりました。
沼川：私は高校1年生の時に熊本地震を経験し、はじめて被災者となりました。災害を目の当たりにして以降、「人助けをしたい」との思いで高校のボランティア部に入部しました。その後、青年赤十字奉仕団に入団しました。

熊本地震からの教訓はありますか

石本：私には4つあります。
「①持続的な活動の展開」被災地での活動で、医療救護が終息した後の復旧・復興のフェーズでのボランティアによる被災者支援について。
「②特殊奉仕団等の特殊技術の活用」
「③DVC（災害ボランティアセンター）運営についての知識をつける」
「④他団体・支部・奉仕団間の情報共有や連携」です。
現在これらのことを意識して活動をしています。
沼川：被災時の活動は、お互いの連携が重要だと感じました。また常に災害が起きたことを想定して行動することが、急な災害での備えにつながるものだと思いました。

日赤DVC運営ゲーム（びっくりモン）の詳細と作成背景を教えてください

びっくりモンで基礎的な部分を体験していただき、支部などで実践的な訓練につなげてほしいです。

青年赤十字奉仕団
石本さん

石本：びっくりモンは日赤DVC運営がシミュレーションできるゲームで、「いつでも」「どこでも」「だれでも」「簡単に」を目指した地震・水害の初動対応を学ぶ熊本独自のカードゲームです。熊本地震の時に、日頃から訓練し災害に備えることが重要だと思い開発しました。準備はとても大変でしたが、少しでも多くの方に災害による教訓が伝わればと思っています。
今後はオンラインで全国へ広めていきたいです。

びっくりモン
オンラインチラシ

びっくりモン研修会の様子

支部災対本部支援（豪雨）の様子

今後のボランティア活動の展望について

石本：災害時には人と人との連携が大切だと感じるので普段から他団体や奉仕団の方々との繋がりを増やしたいです。また研修会に参加して学んだことをオンラインやSNSを活用し（日赤DVC運営ゲーム、びっくりモンのように）全国の仲間に広げ共有したいです。

オンラインでのびっくりモン会議

復興のフェーズでの活動についても医療救護が終息した後の復旧・復興活動としての被災者支援をどこまで実施するべきか、その時の赤十字ボランティアの位置づけと役割を考えていきたいです。
沼川：現在コロナ禍において、オンラインが普及したおかげで、他奉仕団の方々や他県の方との研修会が行いやすくなりました。今後は研究会を増やすことで、他の奉仕団とのより強固な繋がりを持ち、連携を深めていきたいです。

コロナ禍ではオンラインでの他奉仕団との交流が団員のモチベーションにも繋がると思います。

青年赤十字奉仕団
沼川さん

●災害　■赤十字の活動　◆国・他団体の活動など

2017

●7月5日からの大雨災害
●秋田県大雨災害
■赤十字防災セミナー開始

防災セミナーについて詳しくはこちら➡

7月5日からの大雨災害

2018

●大阪府北部地震
●米原市竜巻災害
●7月豪雨災害
●北海道胆振東部地震
■「ぼうさいまちがいさがしきけんはっけん！」完成

7月豪雨災害

赤十字ボランティアのノウハウを被災地で役立てる

2018年西日本各地に甚大な被害をもたらした記録的大雨災害の後、被災地のひとつである岡山県では、各市町の社会福祉協議会のボランティアセンターの運営に赤十字防災ボランティアが積極的に参加しました。その活動は、受付から活動場所までの送り出し、応急手当やニーズのマッチングなど。また、記録的な猛暑の中で、全国から集まったボランティアが熱中症にならないよう、平時は救急法の講習をボランティアで行っている赤十字救急法指導員が、その指導経験を生かして熱中症予防活動を行いました。

2018年7月豪雨災害でボランティアセンターを支援する防災ボランティア

炊き出しの進化　～時代とともに変化していく炊き出しのあり方～

東日本大震災から10年。この10年間で様々な災害が発生し、炊き出しが行われてきました。災害対応が日々進化しているのと同時に、炊き出しも日々進化しております。そこで日本赤十字社の取り組みについて紹介します。

長野県支部での取り組み

安全な炊き出しのために

衛生管理は、災害の度に厳しくなっており、炊き出しを行う際、保健所の職員から注意事項が伝達されます。例えば、生野菜やカットフルーツの提供禁止やアレルギーへの配慮として材料を掲示する等、炊き出しを実施するにあたり厳しいルールがあります。令和元年台風第19号災害の炊き出しにおいても帽子・ヘアーキャップ・マスク・手袋を着用し、衛生管理に注意しながら炊き出しを行いました。

令和元年台風第19号災害の炊き出しの様子

静岡県支部での取り組み

赤十字炊き出しリーダーが活躍しています！

地域で炊き出し活動を実施する奉仕団員は、静岡県支部が行う炊き出しリーダー養成講習に参加し、炊き出しの知識と技術を学んでいます。

炊き出し機材の設置の仕方、包装食袋を使った調理法だけではなく、被災者に寄り添う活動ができるよう、災害が被災者に及ぼす影響と被災者への接し方を身に付けることも。

県内奉仕団のアイデアを盛り込んだレシピ集「炊き出し名人」では、蒸しパンやオムレツ等、栄養バランスを考慮し、健康状態やアレルギーにも対応したレシピも掲載されています。

静岡県支部にて開催されている炊き出しリーダー養成講習の様子

炊き出し名人　Vol.1
https://www.jrc.or.jp/chapter/shizuoka/apeal/pdf/takidashimeijin_1.pdf

炊き出し名人　Vol.2
https://www.jrc.or.jp/chapter/shizuoka/apeal/pdf/takidashimeijin_2.pdf

2019

- 8月豪雨災害
- 台風第15号災害
- 台風第19号災害

2020（コロナ禍）

- 7月豪雨災害
- 「新型コロナウイルスの3つの顔を知ろう！」作成・配布

「3つの顔を知ろう！」について詳しくはこちら➡

2021（コロナ禍）

- 福島県沖地震
- 島根県松江市大規模火災
- 7月大雨災害
- 台風第9号等大雨災害
- 8月大雨災害
- 長野県茅野市土石流災害

コロナ禍での 赤十字ユース委員会のオンラインによる活動

近年発生した新型コロナウイルスは、私たちの生活スタイルを激変させました。コロナ禍になり、赤十字ボランティアの活動はどのように変化したのかを赤十字ユース委員会の岡田さんと福岡さんに取材しました。

コロナ禍の状況になり、赤十字ユース委員会としてどのように感じ、活動にどう影響したか

岡田：コロナが日本各地に蔓延したことでみんなで集まって活動をしたり、ボランティア先への訪問などが減りました。一方で、学校や職場でもオンラインが普及し、リモートでのやり取りが身近になったこともあり、青年赤十字奉仕団（以下　青奉）の活動もオンラインで取り組みやすくなりました。この間、活動オンライン化が急速に進んだように感じます。

福岡：コロナの影響により対面での活動が難しくなりましたが、全国的にオンライン化が進んだためオンラインを主体にしたオンラインカフェやSNSでの活動、防災セミナーなどを開催しました。

なぜオンライン研修を開催したのですか 炊き出し体験、災害エスノグラフィーをやった理由

岡田：2019年、全国の青奉を対象にオンライン研修の希望アンケートを実施した結果、「防災・救急法」に関することを希望される方が圧倒的に多かったためです。
またオンライン研修にすることで、研修を受けることができなかった青奉と、地域にいる専門知識を持ったスペシャリストの方々をマッチングできるからです。

福岡：炊き出し体験は、災害時でも温かく栄養のある食事が簡単に作れることを実際に調理することで体験してもらいました。材料（アルファ米とハイシップもしくはハイゼックス）は着払いで受講者に送り、受講者はそれぞれ同じものを使い研修で体験していただきました。また災害エスノグラフィーでは、災害の被害に遭われた方の声を聞いて、追体験していただきました。

オンライン研修での炊き出し体験の様子

オンライン開催で上手くいった点と反省点

福岡：資料などの準備が大変でしたが、必要な資料（炊き出し用材料など）を受講者に送るなどして、対応できたので良かったです。また、運営側のミーティングが3回しかなかったですが、問題なくスムーズにできたと思います。
反省点は、炊き出し体験で使用するアルファ米に対して、受講者のアレルギーなどを聞き忘れていたことです。今回の研修では問題になるようなことはありませんでしたが、アレルギーで受講者が実施できないなどがないように次回からは、受講者希望のインターネットフォームでアレルギーに対する項目を追加したり、事前アンケートなどをして確認していきたいです。

赤十字ユース委員会
福岡さん

参加者に防災意識を高めてもらうために意識していること

岡田：いかに実生活に「防災の備えへの意識」の落とし込みを楽しみながら準備できるかが大切だと思います。

福岡：防災のハードルが以前は高かったように思うのですが、ローリングストック法（日常的に非常食を食べて、食べたら買い足すという行為を繰り返し、常に家庭に新しい非常食を備蓄する方法）などで個人が少しでも楽しめる備蓄方法（例えばレトルトの多種あるカレーを種類を変えて食事するなど）があればより身近に防災の備えに対しての意識が感じられるのではないかと思いました。

日本人の防災意識についてどう思いますか

岡田：昨今の日本では災害が多く、防災の意識が高まっています。しかし防災の知識がなくては、被災した際に行動に移せません。私たちはその防災の知識を学びたいというニーズに応えられるように環境を整えていきたいと思います。

過去現在未来と時代によって変わっていくボランティアのあり方について

福岡：コロナ禍だからとネガティブにはならずに、常にアンテナを張って困っている人を助けられるように、自分にできることを考えて活動していきたいです。

岡田：ボランティアのあり方が、これまで～これからとどんどん変わりつつあります。現在は、コロナ禍でオンライン化が進んだ活動へと移行しています。しかし、ボランティアの参加の形や活動は変わっても、その想いや信念は変わらないもの。私たちはその想いを受け継ぎ、引き継いでいきたいと思います。

赤十字ユース委員会
岡田さん

座談会

災害と赤十字ボランティアの未来

日本赤十字社　職員
安江 一
入社29年目。現在はボランティア活動の推進など地域における赤十字活動全般に関わる。

日本赤十字社　職員
石黒 朱夏
青少年赤十字での学びがきっかけで、赤十字に就職する。現在3年目で、活躍中。

鹿児島県 赤十字安全奉仕団
春口 哲也さん
子どもができた時に、子どもの安全を考えたことをきっかけに、30代から赤十字で活動。

神奈川県 青年赤十字奉仕団
佐藤 咲さん
大学の危機管理学部で学び、どこかで役に立てればと思い神奈川青年奉仕団に入団。

上智大学
下井 千代さん
コロナ禍に自宅で閉じこもる生活から自分にできることを考え、RCV編集員となる。

今回RCVでは、日本赤十字社職員の安江次長、石黒主事とRCV編集委員3人（鹿児島県 赤十字安全奉仕団・春口さん、神奈川県 青年赤十字奉仕団・佐藤さん、上智大学・下井さん）が「災害と赤十字ボランティアの未来」をテーマにそれぞれの目線で語り合いました。

はじめに

石黒：今年は東日本大震災より10年が経つ節目の年と言えます。この座談会では日本赤十字社（以下　日赤）とボランティアがこの10年間の災害を振り返りその活動と今後について、みんなで話していきたいです。

日赤と災害について

石黒：皆さんは日赤について、どのようなイメージを持っていますか？

下井：私は日赤について、「献血や募金」の活動をしているイメージがあります。災害時にも活動をしていることは知っていますが、具体的にどのような活動をされているのかまでは知らないです。

佐藤：私は以前個人でボランティア活動をしていたのですが、その時の活動を通して、まず個人のボランティア活動だとできることが限られていると感じました。日赤は、これまでの活動と貢献度があるので広く認知されていることからもしっかりとしたボランティア活動が行えるのではないかと考え、奉仕団への入団を決めました。入団後活動をした時にボランティアの理念に関して凄くしっかりとしたものがあり、個人でしていた時よりも様々な活動が行えました。

春口：私はボランティアとして30年近く活動をしてきました。熊本地震の時は、少しでも早く被災者支援を行いたかったため、個人で被災地へ向かい瓦礫の片付や簡単な小屋の組立てをしました。
その際は使用しませんでしたが、赤十字ボランティアで救急法などの指導員をしていたこともあり、知識があったので、いざと言うとき役立てると思います。

石黒：日赤に期待することはありますか？

春口：「ボランティアの活動」と言っても様々な活動があります。そのことをいろいろな方々に深く理解してもらい、広めていただきたいです。

佐藤：私は個人でボランティア活動をしていたこともあり、日赤は知っていたのですが、どのようにアプローチすれば入団や携われるかが分かりませんでした。
私のような方も多くいらっしゃると思うので、もっと日赤へのアプローチがしやすい環境にしてもらいたいと感じました。

石黒：次長はどのようにお考えですか？

安江：春口さんのように、まず人を助けるために動けることは、ボランティアにとって、とても大事なことだと思います。しかし、ボランティアをされている方の中には、所属してはいるものの、活動が伴わない場合もあります。日赤のはじまりは戦争救護の「苦しんでいる人を救いたい」という気持ちからです。その気持ちを日赤の従事者は常に持って活動しないといけません。
またボランティア活動も目先だけのことを行うのではなく、活動のもっと先を見ていけば意識も変わってくると思います。例えば、「日赤➡献血➡血液を必要としている困っている人への支援」と連想できます。それは、献血に限らず、被災された方などにも同じことが言えます。
その先を見据えた「苦しんでいる人を救いたい」という精神こそが、ボランティアとして活動する上で、大切だと言うことが分かります。また日赤には個人ボランティアや他NPOの団体と比較して、組織として体系化され、医療や救急法などの知

用語説明

■災害対策基本法・防災基本計画
災害対策基本法は1961年（昭和36年）に制定された防災に関する法律である。この法律に基づいて作られた国の防災計画を「防災基本計画」といい、これを基にして指定公共機関の「防災業務計画」や、地方自治体の「地域防災計画」が作成されている。
＜平成25年の改正にて追加された内容＞
　国及び地方公共団体は、ボランティアによる防災活動が災害時において果たす役割の重要性に鑑み、その自主性を尊重しつつ、ボランティアとの連携に努めなければならない。

■JVOAD
全国災害ボランティア支援団体ネットワークの略で、東日本大震災での経験を踏まえて、災害時の被災者支援が効率的に行われるよう、地域、分野、セクターを超えた関係者同士の「連携の促進」および「支援環境の整備」を図ることを目的に設立された組織である。
日本赤十字社も正会員団体として所属しており、理事として運営委員会にも参画している。

識や被災地でのノウハウがあります。
石黒：佐藤さんが言った、今、日赤が大きな存在として認知されている要因にはこれまでの活動が反映されていると感じます。

今後どのような方面でボランティアが必要とされているか

佐藤：被災地では、今何を必要としているかのニーズが、時と場合、フェーズによって変化するので行ってみないと分かりません。しかし、現地で様々な行動をするには、救急法などの知識が必要となります。だから日常的に地域の防災教育や防災セミナー・まもるいのちひろめるぼうさい・ぼうさいまちがいさがし　きけんはっけん！などのツールを積極的に活用し、知識を少しずつでも身に付け災害時に備えることが、重要だと思います。また地域ごとで普及し広げることでよりリスクを軽減できると思います。
安江：災害時は、フェーズごとにボランティアのできることは変わります。災害発生直後は、まず命を守ることが大切です。その後、避難所での生活がはじまります。行政は、衣食住などで大きな役割を担いますが、被災者一人一人に寄り添うことは難しいです。しかし、ボランティアならその役割を担うことができます。
熊本地震では、震災後およそ8割の方が直接の災害ではなく災害関連死で亡くなられています。発災後の応急対応が終わるとフェーズは復旧復興を目指します。復旧復興では最終的に被災者に立ち直る強い気持ちを持たせることが重要となりますが、なかなか上手くはいきません。ボランティアは必要なニーズを見据えて被災者と向き合い寄り添えるサポートができるかが重要となります。
また普段からの地域包括ケアや被災者支援、防災教育、講習などを行うことで、災害発生に備えた地域作りが必要だと思います。
石黒：東日本大震災後も活動を継続している奉仕団が多く存在しました。
佐藤：被災者に対して全てを支援するのではなく、被災者自身が自分のレジリエンスを強化していくことが大切だと思いました。また、レジリエンスは災害時だけではなく国際開発などでも必要となるよう感じました。
安江：レジリエンスについては、考え方が大切です。海外の開発協力でも用いられ、「自分自身が立ち直ること」へのお手伝いをしています。
下井：被災者の自立を促すことは確かに重要で、サポートをするだけでは、解決にならないことを考えさせられます。
安江：自立者が増えると、自らも地域のために立ち上がるボランティアが増え、新しいボランティアが育つ環境になると言われています。そうなることで、地域から地域へと移り、広がります。
春口：被災地でのボランティア活動では、他県の奉仕団などとの連携を行うことも多く、横の繋がりが重要だと思いますが、今はその繋がりが薄いように感じています。

座談会の様子

安江：日赤の地域奉仕団は、その地域に根ざした活動をしています。昨今都心部では地域コミュニティが失われ、近隣の居住者を全く知らないなどの問題があります。地域レジリエンスを考えた上でも地域の繋がりが必要であると言えます。
被災地で地域奉仕団は、活動の際にその信頼から活動を行うことができます。また日赤もそのマークが信頼の証となり、被災地での活動が行えます。そこで地域の支援活動をしている多数の支援団体と連携することが多方面での支援をする上で大切です。近年被災地では、社会福祉協議会・NPO・行政の三者連携を行い被災者支援を行っています。日赤としても今後、加わって行きたいと考えています。
石黒：現在コロナ禍に於いて、オンラインでのやりとりが増え進んだため、今までより各地の普及啓発に特化された方とのやり取りがスムーズにできたりします。これまで以上に全国各地への横との繋がりが作りやすくなっているので、日赤の内と外の連携をシェアして強化できると感じました。年齢関係なくどんどんオンラインを活用してほしいと思います。

今後どのようなボランティア活動をしていきたいか

下井：横の繋がりが足りないと思うので、私たち若い世代はSNSやインターネットなどを使用して、繋がりの強化を目指したいです。
佐藤：現在の地域コミュニティの中で、地域奉仕団の年齢層が高いので、もっと若い世代にも入りやすい環境になればと思います。青年奉仕団では活動に限界があるので、様々な世代の方と交流することでいろいろ学び、知識を備えることをしていきたいです。
春口：日赤のボランティアは過剰な期待をされると辞めてしまう方もいました。私はその点からも距離感を大事にして、私自身ボランティアとして何ができるかをよく考え、自立した気持ちでやっていきたいです。今の時代、ドローンや自転車など趣味を母体にした被災地支援や横の繋がりなどもできると思うので、挑戦していきたいです。
石黒：日赤の信頼が大きくその存在を感じられてとても嬉しかったです。今後新たな視点からのニーズをよりマッチさせて活動をしていきたいです。困っている人を助けられるように、必要な知識を学び備えておく必要を感じました。
安江：私は日赤活動より日赤運動と言う言葉を普段使います。これは、ボランティアや職員含めてみんなで活動していると言う気持ちになるからです。今後もその気持ちの上で、全ての世代の方と協力して日赤運動をやっていきたいです。
皆さま、本日は誠にありがとうございました。

■まもるいのちひろめるぼうさい
このプログラムは、自然災害に向き合ってきた日赤と現場の教員が提案する「授業ですぐ使える防災教材」として平成27年に制作され、全国の小中学校に配布された。

■ぼうさいまちがいさがし　きけんはっけん！
幼稚園・保育所向けに作られた防災教材であり、今まで園児は"先生から守られる"存在であったが、この教材では、自ら判断し、「自分の命は自分で守る」ことができるようになることが期待される。

■災害フェーズ
フェーズ（phase）とは「局面・段階」などの意味で用いられており、応急対応（医療救護等）から復旧・復興までの時間の経過や生活の場の変化に伴い、人々の生活や心身の状況、保健・福祉・医療・ボランティアのニーズは変化していく。そのため各フェーズの特徴を踏まえて活動を行うことが重要である。

■地域レジリエンス
レジリエンスは、回復力や強靭性とも訳されるが、災害からの悪影響に対し回復できる社会の力、個人やコミュニティの対応力を意味する言葉である。いつ災害が発生しても地域自身が対応できるように、平時から防災・減災につながる活動を行うことが重要である。

■三者連携・情報共有会議
行政、NPO、社会福祉協議会（災害ボランティアセンター）等の三者が協働して被災者支援に当たる流れが、近年着実に進展している。例えば、熊本地震以降、三者が連携しての被災者支援を円滑に進めるため、被災道府県にて「情報共有会議」が開催されている。

Red Cross Volunteer
RCV No.77
令和3年10月28日発行

読者のみなさんの声

大募集

RCVをよりよい情報誌にするために、みなさまのご意見をぜひお聞かせください！

❶ **今号の特集へのご意見・ご感想**

❷ **こんな特集が見たい！**
「こんな活動がしたい！どこかでしていないかな」。知りたい活動はありませんか？

❸ **活動を全国に伝えたい！**
掲載したい活動がありましたら、ぜひお知らせください。

❹ **RCVをメール配信しています！配信をご希望の方は送信先のメールアドレスをご記載ください。**

上記❶～❹をご記入のうえ、メールにて rc-volunteer@jrc.or.jpまでお送りください。

QRコードからもご回答いただけます ➡

プレゼント

抽選で10名様にハートラちゃんボールペンをプレゼント!!

12月31日（金）必着
当選者の方にはメールにてご連絡致します。

赤十字ボランティアへの参加について

日本赤十字社の活動は、全国のボランティアによって支えられています。あなたも、“苦しんでいる人を救いたい”という思いを行動に移してみませんか？
赤十字ボランティアへの参加は、日本赤十字社各都道府県支部・施設で受け付けています。

Webページで
赤十字　ボランティア　検索

Facebook　Twitter　でも逐次情報を更新しています！

RCV　バックナンバー　はこちらから➡
https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/volunteer/youth/200813_006336/

Editor's Note 編集後記

RCVを通して様々な出会いがあり、たくさんの方にご協力いただきました。災害をテーマにした今回のRCVですが、気候変動による自然災害リスクが増大する中、今私たちにできることを改めて考えるきっかけになれば幸いです。
（神奈川県　青年赤十字奉仕団　佐藤　咲）

世界中で分断が進んでいること。NVC（非暴力コミュニケーション）を紐解くと、実は立場の違いこそあれ皆が望んでいることは同じことであることに気付かされます。我々の活動がその分断を止め解決を導くことに寄与できる未来。今回の機会に深く思ったことです。
（鹿児島県　赤十字安全奉仕団　春口　哲也）

災害を身近に感じる時代。他人事ではなく、自分ごととして捉えることの重要性を、取材や誌面づくりのリサーチの中で身を持って感じることができました。時代の変化と共に、変わらないボランティアの軸を見つめていただければ幸いです。
（明治学院大学　坂本　みのり）

ボランティアの形は年を重ねるごとに変化しています。しかし、今回の取材経験を通してボランティアの「想い」は変わらず引き継がれていくものだと強く感じました。記事を読んで、温かい「想い」に気づいていただければとても嬉しいです。
（明治学院大学　前田　莉穂）

今回、このような機会をいただき良い経験になりました。その理由としてインタビューに応じてくださった方々の、楽しそうな、生き生きとした姿を知ることができたということがあります。自分にできることを考え、周りを巻き込みながら活動をする大切さを学ぶことができました。この場を借りてお礼申し上げます。
（上智大学大学院　柴田　真帆）

今回のRCV制作や取材経験を通じて災害に関する知識が広がり、様々な角度から災害について考えるようになりました。またボランティアの行う具体的な活動についても知ることができ、自分自身も災害に対してどう向き合っていくのか考え直すきっかけにもなりました。
（上智大学　下井　千代）

赤十字の災害とボランティア活動の歴史を年表形式でまとめた今回の冊子は新しい挑戦でしたが、とても内容の濃いものになったと思います。また、インタビューではボランティアの最前線に立つ同世代の方に話を聞いたことでとても刺激になりました。何度も話し合いを重ね作った1冊なのでたくさんの人に読んでもらいたいです。
（明治学院大学　髙橋　美稀）

本年は東日本大震災から10年だ。 震災の教訓を踏まえて災害発生時の行動やボランティア活動の内容なども変化しつつある。今回ボランティアとして災害に立ち向かう方々のお話を伺うことができた。様々なボランティア活動について読者の皆さんに知ってもらえたら幸いである。
（青山学院大学　手塚　颯一朗）

○編集・発行
日本赤十字社事業局パートナーシップ推進部
ボランティア活動推進室　青少年・ボランティア課
電話：03-3437-7083（ダイヤルイン）
ホームページ：https://www.jrc.or.jp/volunteer-and-youth/